

## 令和2年度（2020年度）第2回北海道東部の竪穴住居跡群調査懇談会 議事概要

### 1 日時及び場所

日時：令和3年（2021年）3月24日（水）13時00分から16時00分まで

場所：北海道教育庁道庁別館7階（札幌市中央区北3条西7丁目）

### 2 出席者

<構成員：4名>

熊木俊朗 東京大学大学院人文社会系研究科教授（座長に選出）

福田正宏 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

天野哲也 北海道大学総合博物館資料部研究員

内山真澄 元・稚内市教育委員会学芸員

<竪穴群調査の実施に関係を有する者：9名>

斉藤譲一 稚内市教育委員会教育総務課学芸員

乾 茂年 浜頓別町教育委員会生涯教育係学芸員

高島孝宗 オホーツクミュージアムえさし館長

藤澤隆史 礼文町教育委員会主査（社会教育）

山谷文人 利尻富士町教育委員会次長補佐

林 勇介 湧別町教育委員会湧別町ふるさと館 JRY 学芸係主任（学芸員）

小田島 賢 厚岸町海事記念館学芸員

猪熊樹人 根室市歴史と自然の資料館学芸主査

鈴木 信 北海道立埋蔵文化財センター指定管理者（公財）北海道埋蔵文化財センター第1調査

部長

<北海道教育委員会：4名>

相川芳久（文化財・博物館課長）、西脇対名夫（文化財・博物館課長補佐）ほか2名

<傍聴者：2名>

### 3 話題提供及び意見交換

<北海道東部の竪穴住居跡群の文化財としての価値（中間報告）>

事務局が、令和2年度の現地調査の成果とデータベース作成状況について中間報告を行った。

- ・第2次調査（平成30～令和3年度）における令和2年度の実施内容は、引き続き竪穴群の全体像の把握とその価値の説明、資産構成の検討及び類似遺跡との比較について検討を行った。
- ・道教委が取り組む総合調査では、竪穴群の基礎情報（文献調査）や現状の把握と記録化（現地調査）を目的とした調査を通じて、「窪みで残る竪穴住居跡」のデータベースを作成中。
- ・（公財）北海道埋蔵文化財センターが取り組む個別調査では、令和2年度から興部町豊野竪穴住居跡の調査が開始された。
- ・現在道内で確認されている竪穴住居跡の窪みの傾向を確認し、特に宗谷管内については20軒以下の竪穴住居跡群で構成されることが多く、100軒以上の規模のものはオホーツク・日本海側に散見されることを指摘。
- ・現地調査では、宗谷管内の稚内市で実施した道仮指定史跡の「クサルの竪穴群」と稚内高校グラウンド遺跡との関係、新規に確認した大樹町内の竪穴群等について報告した。
- ・次年度以降は、道教委による第2次調査成果を『北海道の竪穴群の概要（改訂版）』としてHP上で公開予定であること、データベース補完のために継続的に現地調査を実施すること、類似遺跡の検討（国内外）を行う。個別調査では興部町豊野竪穴群を引き続き調査し、重要遺跡確認調査報告書を刊行する予定である。

<話題提供：ロシア極東の竪穴住居群と北海道一大陸河川氾濫原の保存状態と竪穴ー>

福田正宏氏が、「ロシア極東の竪穴住居群と北海道について一大陸河川氾濫原の保存状態と竪穴ー」と題して話題提供を行った。

- ・東北アジアからみた北海道の竪穴を特色づけるため、事例としてアムール下流域の新石器時代から古金属器時代の竪穴住居跡の発掘調査事例や、アムール河特有の生態学的・地学的背景から竪穴住居の形成過程について現地調査の紹介。アムール下流域の完新世以後の土地利用史を確認し遺跡の現況が説明された。その多くは河川による自然的変容やスターリン政策以後の文化的変容を強く受けていることを前提として、竪穴住居の埋没過程を考える必要がある。
- ・アムール流域は居住適地が制限され、竪穴住居が再利用（人為攪拌）されることが多いことや、河川氾濫による浸食・崩壊の影響を受けることから、居住直後の様子がそのまま保存される事例は限られる。よって現在のところサハリンや北海道と同じ基準で、竪穴の窪みの埋没過程を再現することは困難。
- ・竪穴の埋没と再利用について、ルチェイキ1遺跡の発掘調査成果をもとに、出土遺物の層位的状況や型式学的位置づけを行い、竪穴住居の埋没過程と再利用の過程を復元。
- ・海外学術発掘調査と現地に住む人々への実践指向型の支援・協力については、現地教育行政機関との連携を行い、地域文化資源としての歴史遺産の保存活用事業に関して、現地の人々が無理なく受け入れられる国際協力を行っていくことなどが必要。

<意見交換>

(構成員からの意見)

- ・遺産から資産・資源に向けて、次の三点が重要。①ハード（竪穴群）としての圧倒的な視覚的迫力、存在感、②ソフトとしての環境・生活体系復元（アイヌ民族などの「民族知＝野生の科学」の意義）、持続的な暮らしを支えるものーサケ、海獣、クマ、オオワシ（交易）、雑穀、野生植物（ノリウツギ、ハンノキ、オヒヨウ、シナほか）などの評価、③応用・活用のための資源として、学校教育での教材（体験・参加も）、エコツアーなど体験・参加型・観光普及事業、地域の見直し・潜在的ポテンシャルの再認識・発見、振興が必要であり、これらが世界遺産を目指す場合の支えとなる。
- ・稚内高校グランド遺跡の竪穴は、グランド造成時にその法面で竪穴住居の断面を確認した。道教委報告にあったクサナルと考えられる竪穴の位置は、過去の造成工事によって大きく削平されているため、ほとんど残されていないのではないか。
- ・稚内市内の竪穴住居跡群については、草木が生い茂り徒歩によって探すことは相当に困難であるため、未周知の竪穴群も相当残されていると思われる。
- ・道教委の取組みとして、宗谷管内での継続的な現地調査は実施するのか？竪穴群の事業は今後どのように取り組んでいくのか？
- ・当自治体では竪穴住居跡群を含めた発掘調査がここ数年継続的に実施されてきた。竪穴の窪みは草地化で見えないものも多数あるが、現地調査を通じて、包蔵地範囲の整備を引き続き行う必要がある。
- ・道教委による竪穴群調査を通じて、道埋文の調査から自治体主体となる発掘調査へと引き継がれ、町での積極的な活用に向けて取り組んでいるところ。こうした事例が他の自治体でも実施されることが望ましい。
- ・現在地方在住の若年層の町外への流出が激しい。およそ7割程度の子供が高校を卒業後町外に出てしまう。地域への愛着を涵養するための一つの取組みとして、小規模であるが発掘調査を体験してもらえらる機会を設けている。

(事務局)

- ・令和3年度は最終年度であるため、継続的に現地調査を行うことと合わせて、遺跡群の全体を対象とする保存活用体制の設立に向け取り組みたい。現状では、市町村の支援を得ながら道教委の取組みを進めているが、関係自治体の協議会等で定めた計画に沿った調査推進をめざしていきたい。
- ・今回の懇談会でご指摘いただいた活用面での具体的な取組み方法や実践例などを踏まえて、再来年度以降の保存・活用の計画を検討していきたい。